

平成31年度学校自己評価

鳥取県立智頭農林高等学校

| | | | |
|-----------------------------|---|---------------------|---|
| <p>中長期ビジョン (学校ビジョン)</p> | <p>「一人ひとりの生徒を大切に」を教育の根幹におき、勤労と責任を重んじ、心身ともに健康で地域産業及び社会の発展に貢献できる人材を育てる。</p> | <p>本年度 重点目標</p> | <p>(1)専門教育の充実 ~各科の授業実践及び資格取得の取組をとおり、学びの質の向上を図る~ (2)学力向上 ~基礎学力の定着と授業力の向上~ (3)キャリア教育 ~進路指導の充実と職業観・勤労観の育成~ (4)こころの教育 ~規範意識の醸成、基本的な生活習慣の確立、家庭との連携~ ~自己理解・他者理解に基づいた人間関係づくりの支援、自己肯定感の育成、健やかな体づくり~ ~教育相談、特別支援教育及び人権教育のより一層の充実~ (5)地域連携の充実 ~地域の教育資源を活かし、本校の教育資源を地域に活かす、顔の見える地域連携、先輩から後輩へ、広報の拡大と充実~ (6)学校業務の改善 ~学校業務改善の取組みを進め、一人一人を大切に教育の充実を図る~</p> |
|-----------------------------|---|---------------------|---|

| 平成31年度当初 | | | | 評価結果 (2)月 | | | | |
|-----------|------------------------------|--|--|---|---|----|--|----|
| 評価項目 | 評価の具体項目 | 現状 | 目標(年度末の目指す姿) | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 評価 | 改善方策 | 備考 |
| 1 専門教育の充実 | 授業実践と資格取得の取組をとおして、学びの質の向上を図る | ○スーパー農林水産業士には、H29年度は2名、H30年度は4名が認定されている。 ○資格取得に向け積極的に取り組む生徒もいる中、消極的な生徒もおり、意欲の喚起と学力の底上げの必要性を感じている。資格取得は昨年度と同程度であった。 ○専門教科と普通教科との間で一部連携が図られていたが、全体の取組には至らなかった。 | ○地域の産業界や教育機関等と連携し、各科の専門性を深め、生徒は専門的な知識・技能を身に付けている。 ○「スーパー農林水産業士制度」を有効活用し、学校と地域産業のより一層の連携が図られている。 ○個々の将来の目標を定め、より意欲的に学習に取り組む、専門性を活かした資格取得に励んでいる。資格取得の合格率が前年度比10%以上向上している。 | ○地域の産業界や教育機関との連携を深め、社会人講師等を積極的に活用し、地域の専門家から教わることで高度な技術を習得する。 ○普通教科と専門教科が連携し、実践的な農業や家庭科目の学習課題と、普通教科と学習課題を共有し、お互いの効果的な学習指導方法を探り、実践する。 | ○藍染や格子の制作や、その他農業、林業の授業では外部講師として、地域の専門家から学ぶ活動を継続して行った。 ○資格取得に積極的に取り組んだ生徒もいるが、全体的に受験者が少なく、資格取得の合格率は前年度77%に対し、本年度66%であった。 | C | ○引き続き、地域との連携を深めていく。 ○資格情報を授業等を通じて啓発していく。 | |
| 2 学力向上 | 基礎学力の定着と授業力の向上 | ○授業や教室環境のユニバーサルデザイン化が進められた。 ○「学び直し」に係る授業研究会の実施(年2回)に加え、「授業を語る会」を年2回実施するなど職員全体が授業改善への意識が高い。 ○ICTタブレットの更新、活用環境の改善を行ったことで活用頻度が増加している。 ○本校生徒の基礎学力向上につながる手立てを検討し、実践に向けて取り組もうとしている。 | ○成功体験の積み重ねや学びあいのある授業、ICTを活用した授業、授業のユニバーサルデザイン化などの取組が組織的に行われており、生徒の基礎学力向上につながっている。 ○生徒の授業アンケートの結果、授業の理解度、分かりやすさや興味等が80%以上になっている。 ○「学びあい」を取り入れた授業の実施頻度が、各教員年間5回以上になっている。 | ○授業研究会、授業実践報告会や各種研修会への参加をとおして、教員相互の授業力向上を図る。 ○生徒各自の特性や対人関係に配慮した「学びあい」をとおして、生徒の実状に即した学習方法を模索し授業の改革を進める。 ○学習意欲を高め、「学びあい」の活動を促すためのICT機器の活用方法を検討する。 ○「授業での具体的な取組」を作成し、統一テーマを持って全職員で取り組む。 | ○HP活用研修会、教職員タブレット研修会、授業研究会、教職員研修「授業を語る会」の実施により、教員相互の授業力向上の意識を高めている。 ○生徒アンケート結果から、授業に真面目に取り組んでいる生徒の割合が87%。授業での振り返り学習(中学時の学習の復習)をとおして基礎学力が身についたと答える生徒が82%であり、中間評価時点より4%上昇した。また授業評価アンケートの結果、授業の説明がわかりやすいと答える生徒は90%、学習する意欲を引き出されると答える生徒が83%であった。 ○職員アンケート結果より、「基礎学力定着に向けた授業での具体的な取組」を実行している職員が約70%、「学びあい」を取り入れた授業に取り組んでいる職員が60%であった。生徒の学習に対する関心・意欲の向上に繋がっていると感じる。 | B | ○引き続き、教員相互の授業力向上を目的とした研修会を実施する。 ○「授業での具体的な取組」についてのアンケート結果の検証と次年度に向けた検討を行う。 | |
| 3 キャリア教育 | 進路指導の充実と職業観・勤労観の育成 | ○本校の教育内容と関連した企業等への就職者がH29年度は19%、H30年度は34%であった。 ○インターンシップにおいても科の学習内容と関連した企業を選択する生徒が増えてきた。 ○専門性を活かした地域連携が進みつつある現状であるが、生徒の進路先と必ずしも合致していない。 | ○専門的な技術を習得して、地域の担い手として地域社会に貢献しようとする意識を持っている。 ○上級学校への進学を目指し、意欲的に専門的な資質・能力を習得し、将来の地域を担うリーダー的存在を輩出している。 ○本校の教育内容と関連した企業等への就職者および専門性を活かした進学者の割合が30%または10名を超える。 | ○キャリア教育の年間計画に従い、3年間で体系化したプログラムを実施する。 ○先進校視察、上級学校への見学研修および高大連携事業を活用し意欲を持たせ、進学への意識付けを行う。 | ○上級学校見学研修や智頭町企業説明会は継続した取組となり、地域の担い手としての意識を高める機会となっている。 ○個々の進路実現に向けた進路指導体制の充実を図るため、キャリア支援会議で指導方針を検討した。 ○本校の教育内容と関連した企業等への就職者および専門性を活かした進学者が27%であり、中でも鳥取県立農業大学校への進学者が多かった。 | C | ○キャリア教育関連行事の事前・事後指導ができなかった。キャリア・パスポートを活用し、充実させていきたい。 ○林業に関する企業等への就職者および上級学校への進学者を輩出できなかった。 | |
| 4 こころの教育 | 規範意識の醸成 | ○指導対象の生徒数は減少しているが、指導内容は多様化しており、家庭や地域、外部機関と連携した指導体制を継続して行っている。 ○一部に授業規律の守れない生徒や挨拶のできない生徒がいる。 ○生徒一人ひとりを大切に指導を心がけることで生徒理解を深め、いじめや不登校等の未然防止に努めている。 | ○基本的な生活習慣が身につく、落ち着いた学校生活を送るとともに授業規律が確立されている。 ○校則を遵守するとともに、端正な服装・頭髪、日頃のあいさつなど自らが行動できる。 ○社会規範や一般常識を理解し、道徳心を持って行動することができる。 ○特別指導を受けていない生徒の割合が90%以上、また、携帯マナー、交通安全に関してルールを遵守している生徒の割合は90%以上となっている。 | ○毎朝登校時の立ち番で服装・あいさつ指導を行う。また、PTAによる通学路交通安全指導・あいさつ運動も実施する。 ○授業や集会での授業規律・集団規律を徹底する。 ○いじめアンケートやhyper-QUを計画的に実施し、生徒が抱えている問題の早期発見に努め、生徒理解を深めながら指導する。 ○各研修会を実施する。 | ○毎朝の登校時の立ち番での服装・あいさつ指導を実施し、PTAによるあいさつ運動を実施した。 ○教職員対象のいじめ防止を目指した学級・学校づくり研修、PTA及び教職員対象の情報モラル研修、生徒対象の情報リテラシー教育など各研修会を実施した。 ○いじめに関するアンケート及びhyper-QUの結果を全職員で共有し、生徒理解と支援に努めている。 ○特別指導を受けていない生徒の割合は79%(中間評価は85%)であった。生徒アンケートで、携帯電話マナー、交通安全ルールを守っていると回答した生徒は、それぞれ92%(中間評価は88%)、96%(中間評価は93%)であった。 | C | ○学校生活の見守りと面談やアンケート等の活用により生徒の変容に気づき、いじめの早期発見と防止に努める。 ○カード指導を継続し、落ち着いた学校生活を送らせるとともに授業規律を確立させる。 ○各分掌や学年及び保護者との連携をより密にして生徒理解にあたる。 ○外部機関との連携を図り、生徒理解に基づく適切な指導に努める。 | |
| | 生徒支援の充実 | ○毎日の授業に規則正しく出席することができず、欠席・遅刻・早退を重ねてしまう生徒が少なからず存在する。 ○特別支援教育への理解は向上しているが、支援のためのスキル不足による困り感がある。 ○通級指導教室の時程内実施開始に伴い、新たな課題が予想される。 | ○生徒一人ひとりが居心地のよいクラスの中で落ち着いた学習に取り組んでいる。 ○hyper-QU結果の「学級満足群」に入る生徒の割合が45%以上を維持する。 ○通級指導教室の運営がスムーズに進行し、支援の必要な生徒一人ひとりに継続した支援が行われている。 | ○担任・関係職員と保護者、SC・SSW、外部機関と連携を密にして、生徒の支援にあたる。 ○ソーシャルスキルトレーニングを活用して、生徒の自己理解・他者理解を進める。 ○通級指導の調査研究と平行し、対象生徒の個別対応を行う。 ○生徒支援のためのスキル向上に向けた教職員研修を行う。 | ○外部の専門家によるソーシャルスキルトレーニングでは、生徒同士が上手に開く場面が見られ、生徒の自己理解・他者理解を促すことができた。 ○hyper-QUで「学級満足群」に入る生徒の割合は1回目36%、2回目38%であり、昨年の同時期より割合は低いが、2回目でもやや向上した。また、要支援群にいる人数が1回目6人から2回目2人に減少した。 ○発達障がいのある専門家による職員研修会を実施したが、回数が少なく、現場での支援の充実には繋がらなかった。 ○通級指導教室は予定通り開設し、関係教員と連携を取りながら実施している。 | C | ○支援体制の充実が課題。情報の共有化や統一した支援・指導の在り方が必要。 ○校内委員会等でもある程度の共有は出来ているが、学年と協力してその機会を増やしたり、生徒支援委員会の招集(現行の規定では必要に応じて)を定期的実施していくことも必要かと思われる。 | |
| 5 地域連携の充実 | 地域連携を通じた全人的発達促進 | ○ちのりんショップは地域に定着しつつあり、地域の方からの応援を直に感じられる場となっている。 ○地元の保育所との菜園活動や、福祉施設での実習など新たな分野での地域交流の場ができており、様々な人との関わりを学ぶことができている。 ○地域連携を教育内容に取り入れている専門科目は、科によるばらつきがあるものの、H30年度は約42%であった。 | ○地域連携事業の活用により、生徒に自己有用感、達成感が生まれ、積極的に学校生活を送っている。 ○地域の方との交流をとおしてコミュニケーション能力や表現力が高まっている。 ○地域連携を教育内容に取り入れる専門科目が50%以上になっている。 | ○地域の現状や文化を理解し、将来地域を担う人材を育成する目的の科目である「地域基礎」の一層の充実を図る。 ○地域の保育園・高齢者福祉施設との園芸交流、藍染交流を行い、相手を思いやる心やコミュニケーション能力を育てる。 ○定着しつつあるちのりんショップをさらに改善し、生徒のコミュニケーション能力や経営感覚を育成する。 | ○保育園との園芸交流、藍染交流、智頭中との交流を通じて生徒の自己有用感、達成感を涵養し、学校生活の活力に繋がっている。 ○ちのりんショップは地域に定着しているように思う。生徒も接客技術を学び、コミュニケーション能力を高める機会となっている。 ○生徒の中には人前で話すことを苦手とする者も多く、指導が難しい面もあるため、新たな専門科目で地域連携を取り入れるためのハードルが高くなっている。 | B | ○ちのりんショップの製品を全科で取りくむようにしたい。 ○なかなかコミュニケーションの取れない生徒にどう機会を与えるかがむづかしい。 | |
| | 地域連携を通じた学校と地域の活性化 | ○生徒数が少ないなか、地域の木女会との技術交流、棚田の補修、格子の製作、藍染のれんの制作などの専門性の高い取組を継続して実施できている。 ○地域連携活動の評価アンケートは88%の回答が「よい活動である」との回答で満足度が高かった。 ○地域連携活動を発信して本校の特色や魅力をPRしているが、生徒募集での効果が十分とは言えない。 ○中学生の体験入学は、参加者が昨年より3割増えた。 | ○農業高校ならではの「ものづくり」体験や「地域交流」体験によって、個々の教員の持つ専門技術や学校の教育力が地域の活性化に役立っている。 ○生徒や教職員の専門的知識や技術力を地域に発信している。 ○地元地域へ本校の取組が浸透し評価され、地域からの評価アンケートの満足度が80%以上になっている。 | ○本校の持っている技術力を活用し、棚田の補修、格子の製作に取組み、伝統的な文化や技術を継承し発展させている。 ○技能フェア、地域のイベント、学校祭を通して体験教室や展示即売を行い学校の専門的知識や技術を地域へ発信する。 ○各種事業で、地域の専門家を外講師として招聘し、その技術力を本校教育へ活用するとともに、本校の教育内容の理解を促す。 | ○智頭町魅力アッププロジェクトの「格子の製作」、「藍染のれんの制作」は6年目を迎える。地域の方にも活動が浸透してきている。 ○ちのりんショップや各種イベント(手話パフォーマンス甲子園など)での生産物販売でも、生徒の活動をPRすることができた。 ○地域アンケートにおいて、「智頭農林高校の地域連携の取組みは、地域の活性化に役立っているか」との回答において、「そう思う」及び「ややそう思う」の割合が100%であった。 | A | ○継続できる事業は続けていきたい。 ○学校での取組をもっと地域へPRしていくため、定期的に展示する方法を考える。 | |
| 6 学校業務の改善 | 校務分掌(グループ)業務の見直し | ○職員数の減少に伴い、分掌を再編しグループ制をとっているが、業務は年々増えており、グループ長の負担は大きくなっている。グループに入らない、あるいは複数グループに関わる業務も増えてきている。 | ○グループ内で互いに業務を確認し、分担・協力するということグループ制の良さが生かされている。 ○月あたりの時間外業務を、平成30年度比で10%削減している。 | ○グループの業務を年間計画に落とし込み、グループ内でスケジュールバランスをとりつつ、グループ内での協力体制をつくる。 ○グループ業務の見直しを検討する。 ○教務室等の整理整頓を推進する。 ○電子データの共有とフォルダの見直しを検討する。 | ○グループ業務の整理をしたが、グループ内での業務の分担・協力体制の改善、学校全体としてのグループ制見直しには至らなかった。 ○業務の見直し・削減等についての職員アンケートを実施し、次年度行事予定の立案と今後の業務への取り組み体制等に活かす予定であるが、これからの取り組みである。 ○教務室の整理整頓を推進し、文書等が適切に保管できるロッカーの整備に取り組みが完了していない。 ○年度初めに共有フォルダの構成について周知し、第1階層の整理を行った。 | C | ○職員アンケートの結果を参考に、グループ制と、業務の見直し削減に向けて継続して検討する。 ○教務室内に文書が適切に保管できる環境の整備を進める。 ○フォルダ内の第2階層以下の整理を進める。 | |

評価基準 A:十分達成[100%] B:概ね達成[80%程度] C:変化の兆し[60%程度] D:まだ不十分[40%程度] E:目標・方策の見直し[30%以下]